

玉鬘物語が孕むもの——竹河巻の位相

齋藤田紀子

正編から宇治の物語の間におかれた「紅梅」の真木柱、そして「竹河」の玉鬘というように所謂「玉鬘物語」のヒロイン達の後日譚、特に竹河巻——古注にも別人作と疑われ、池田亀鑑氏によるものを筆頭に、近年では野口元大氏等によって(1)成立論上問題視されてきた「竹河」が後世作だったとして、ならば何故、そこにこの物語を必要としたのか、という疑問を持ち、この巻に着目した。竹河巻は森一郎氏(2)藤村潔氏(3)によって既に宇治十帖への伏線的に捉えなおされ、あるいはまた、大朝雄二氏は(4)匂宮三帖は宇治十帖の伏線・先駆というより「作者が物語の構想を模索している過程の草稿の類」とみておられる。また玉鬘物語から宇治十帖を見据える読みに古く萩原広道の『源氏物語評釈』の夕顔・玉鬘と浮舟を「むかへ」と捉えるそれがあり、現代においても白崎ちか子氏が観音靈験譚としての両者の物語を比較し非・救済の物語の主題の深まりを論じておられる。(5)

本論では「さすらへ」「くさはひ」という玉鬘物語の要素が宇治十帖の物語へ及んでいる問題は何かということを考えてみたい。

萩原広道に「筑紫と常陸と東西に対へ」られているように、夕顔・玉鬘も浮舟もそれぞれ鄙の地に育ち「さすらいの女君」としての様相を共有している。しかし、「さすらへ」の語は単に空間的な流離を指すばかりではなく、朱雀院の

「女は心より外に、あはあはしく、人におとしめらるる宿世あ

るなん……うち棄ててむ後の世に漂ひさすらへむこと……」(

若菜・上)

という女三宮の身にふりかかる「さすらへ」への心配にあらわれる用法など、後見の在・不在によって身の上を左右してしまうという、女性の人生が根本的に抱えている問題をも表す語である。長谷川政春氏も「さすらい」の語の用例を分析し、親の不在が子の「さすらい」を招くという親の危惧の念は、光源氏(まだ養父の印象を残している)が紫の上を、朱雀院が女三宮を、八宮が娘たちを気づかう点によくみられるとしておられ、また、「『源氏物語』においては、△さすらい△は内面化され、特に男よりも女の生きかたにおいて一層内面化されていると言えるのではないか。

(夕顔)——玉鬘——(女三宮)——宇治の姫君たち——浮舟

という△さすらい△の系譜をたどることができるのである。」とされている(6)。

夕顔に関する「さすらへ」の用例は

「まだ世にあらば、はかなき世にぞさすらふらむ」(帚木)

「母君のかひなくてさすらへたまひて、行く方をだに知らぬかはりに、人並々にて見奉らむ、とこそ思ふに……」(玉鬘)

の二例である。右大臣家からの迫害によって西の京の乳母の家へ、そして五条の家へ、さらに源氏に連れられて行った先の廃院で客死し、消息を絶った「行く方をだに知らぬ」夕顔の「さすらへ」は、空間的なスケールとしては都の範囲内のものであるが、まさに帚木巻の頭中将が常夏の女の身の上を案じた言葉「世にぞさすらへ」に表される、身の「さすらへ」、流離の生涯とみてよいだろう。

「年月隔たりぬれど、飽かざりし夕顔を、つゆ忘れたまはず」とはじめられる玉鬘の物語が夕顔の影を色濃く引いたものであるこ

とは様々に指摘されているところである(7)。そのような前史を負い

「いかなる罪深き身にかかる世にさすらふらむ」(玉鬘)

と啖く玉鬘の「さすらへ」は一見長谷寺靈驗譚によって救われるかに見えて、その「さすらひ」は終わらない。実は同父の兄弟であるはずの内大臣家の息子たち、そして養父であるはずの源氏から懸想をしかけられたり、髭黒によって略奪されるようにして結婚したり、まさに玉鬘の身は男性達の欲望によって翻弄される、さらなる「さすらひ」の運命を辿るのである。まず、源氏に引き取られることを知って、

「ただかごとばかりにても、実の親のけはひならばこそうれしからめ、いかでか知らぬ人の御あたりにはまじらはむ」(玉鬘)

と言って、女房たちに宥められている。

六条院に引き取られてからも玉鬘はひたすら「実父」との再会を願ひ、そこを自分の本来生きるべき場所とは考えていないようである。

「かくいと隔てなく見たてまつり馴れたまへど、なほ思ふに、隔たり多くあやしきが、現の心地もしたまはねば、まほならずもてなしたまへる」(初音)

と、玉鬘は源氏に警戒心を抱き、思い悩むが、

「何ごとも思ひ知りはべらざりけるほどより、親などは見ぬものにならひはべりて、ともかくも思つたまへられずなむ」

今さらにいかならむ世かわか竹のおひはじめけむ根をばた

づねん (胡蝶)

と、応じるしかない。「さるは心の中にはさも思はずかし」と語ら

の父のいずれの世界にも自己の帰属すべき場所がないということであった。(8)としておられる。

そもそも源氏の方は玉鬘を

「すき者どもの心尽くさするくさはひにて、いといたうもてなさむ」

「すき者どものいとうるはしだちてのみこのわたりに見ゆるも、かかるもののくさはひのなきほどなり。いたうもてなしてしかな。なほうちあはぬ人の気色見あつめむ」(共に玉鬘)

と、「くさはひ」として後見を引き受ける。「くさはひ(種はひ)

」とは、「物事の種となるべきもの」(北山谿太氏編『源氏物語辞典』)であり、玉鬘十帖では「もののくさはひ」「もののくさ」といった語とともに、いずれも源氏と内大臣によって、例えば蜚蜚で内大臣家が

「女はあまたもおはせぬを、女御もかく思ししことのとどこほりたまひ、姫君もかく事違ふさまにてもしたまへば、いと口惜しと思す」(蜚蜚)

と、子だくさんでありながら、后がねとなる娘が少なく、その少ない娘梅壺女御は立后出来ず、雲居雁もまた東宮入内を棒に振って、夕霧と恋仲になってしまっている、という外戚政略における窮状が語られた後、内大臣の

「かく少なかりけるもののくさはひ一つを失ひたることの口惜しきこと」(蜚蜚)

という行方知れずとなった夕顔の娘に対する述懐に現れているように、それぞれ子供、否、よりはっきりと「娘」——結婚させ他家との絆を深める、或いは入内させ皇統へと結びつく、家の繁栄の「種」となるべき「娘」の意として使われている。玉鬘にはそのような

れるように、心中には何より「根をたづね」ることを希求しながら、それをするのが叶わず、玉鬘巻の詠歌

数ならぬみくりやなにのすじなればうきにしもかく根をとどめけむ

という「浮き／憂き」という状態にしか「根」をとどめることしか出来ない、自らの生きる場を確保できずにいる彼女の「さすらへ」はあいかわらず終わっていないのである。さらに、玉鬘への恋心を露にしていくな源氏に困惑し、

「実の親の御あたりならましければ、おろかには見放ちたまふとも、かくさまのうきことはあらましや」

「父大臣などの尋ね知りたまふにても、まめめしき御心ばへにもあらざらむものから、ましていとあはつけう、待ち聞き思さんこと」(共に胡蝶)

内大臣家でどんなに粗略に扱われようと、今の境遇よりはましであり、源氏の懸想が実父内大臣に知れたら、自らの貞操如何に関わらず、ますます娘として認められがなくなるのではないか、と心配し、或いはさらに進んで

「親などに知られたてまつり、世の人めきたるさまにて、かやうなる御心ばへならましければ、などかはいと似げなくもあらまし」(蜚蜚)

と、源氏を心底否定しないまでも、あくまでも玉鬘の思いは実父内大臣へと回帰していくのである。しかし、以上に引用してきた述懐の端々からは日向一雅氏が指摘されるように内大臣が父親として自分を親身に扱ってくれることに対する彼女の諦めが読み取れるのである。それは篝火巻で近江の君の処遇に関する噂を聞き及ぶに付けて決定的なものになる。日向氏はこの玉鬘の境遇を「玉鬘には二人

役割が担わされていたのである。広田収氏は継子譚『落窪物語』について「少将の継母への復讐は家の奪還——継ぐべき娘がいないと家の伝領は宙に浮くということをこの事件は結果的に描き出すことになる」(9)と、「家と継子との関係」について論じておられる。三谷邦明氏は、絵合巻から玉鬘十帖に至るまでの源氏と内大臣の政治状況を追って内大臣の劣勢を確認され「明石姫君は乙女巻々末において七歳であったと想定され、十六歳の雲居雁と比較して裳着の時期には早すぎるのであって、東宮妃としては年長であるものの雲居雁は頭中将にとって決定的な意味を持っている切札である。この切札を崩し、雲居雁を夕霧と結ばせ、明石姫君を東宮妃として入内させるためには、その頭中将のカードと交換する切札を光源氏は持たなければならぬ。」とされ、玉鬘を「光源氏の栄華をはなやかに彩る装飾品」と表現しておられる(10)。このように「二人の父」の間で駆け引きの具にされる玉鬘の身の処遇は日向一雅氏が指摘されているように、藤椅巻冒頭で

「実の父大臣も、この殿の思さむところを憚りたまひて、うけばりてとり放ち、けざやぎたまふべきことにもあらねば」と玉鬘自身によって憂えられ、さらに夕霧に玉鬘の処遇を問い詰められた源氏に

「わが心ひとつなる人の上にもあらぬを」

「なほ、宮仕へをも何ごとをも、御心ゆるして、かくなんと思されんさまにぞ従ふべき」(以上全て藤椅)

と、責任逃れされ、日向氏の言葉を借りるなら「……かれらは互いに牽制しあうことによって玉鬘の身のふりかたに責任を持って明確な方針を指し示すことができなくなっていたのである。強くいえば責任ある対処を放棄したのである。「父」の不在が再び顕在化したと

いうことである。」(8)という状況に行き着くのである。源氏は引用した台詞に続けて

「女は三つに従ふものにこそあなれど」

と、所謂女の「三従」を持ち出す。これによって、娘として自らの運命を任せ「従う」べき、「父」すら不在の境涯がいっそう印象付けられるのであり、その後「夫」「子」と「従うべきもの」を変えていったときどのようになっていたかは、後日譚「竹河」を読む上で改めて論じる必要があるだろう。

また、求婚者達にとっては、蜷巻で源氏が兵部卿宮に対して、

「わがむすめと思すばかりのおぼえに、かくまでのたまふなめり。人さま容貌など、いとかくしも具したらむとは、え推しはかりたまはじ」(蜷)

と考えるように、玉鬘の魅力には彼女自身のそれに加えて「源氏の娘」というファクターが大きいのではないだろうか。後に女三宮に対する恋に係わって描かれるように、柏木の高貴な妻を求める性向からもそれは考え合わせられるであろうし、或いは、髭黒大將が式部卿宮の娘を離縁して玉鬘を妻に迎えることの政治的意味(10)を考えると、そこには「内大臣の娘」という属性も加わり、より複雑な(大きな)意味を持つてくる。玉鬘は「美しい装飾品」であると同時に(或いはそれ以上に)「六条院の装飾品」として存在し、彼女を手に入れることは「源氏の娘」「六条院の娘」——高貴の血、そして繁栄の家門——を手に入れるということになるのである。

求愛者の最たる冷泉帝と玉鬘の関係はどうであろうか。後藤祥子氏は歴代尚侍の史実をふまえられ、源氏が玉鬘の出自境遇を「値踏み」した結果、「皇妃ともつかず、入内後は皇妃に準ずる不自由さに縛られ、正妃として待遇されればまだしも、遂に尚侍以上の何者

とが出来るのではないだろうか(12)。玉鬘巻で右近との再会を喜ぶ玉鬘の詠歌「初瀬川はやくのことは知らねども今日の逢ふ瀬に身さへながれぬ」に、「身さへながれぬ」という表現が用いられることはそれを暗示しているかの如くである。

藤袴巻で懸想人達を悪評を受けぬよう上手くあしらひ、最後まで慕われて帝の元へ出仕する彼女は

「女の御心ばへは、この君をなんもとにすべき」(藤袴)

と、源氏・内大臣両者から讃えられるように「家」を形成するものにとって理想の「くさはひ」であった。しかし、このように見てきた玉鬘の六条院での境遇こそは、

「とてもかくても見苦しう、かけかけしきありさまにて心を悩まし、人にもて騒がるべき身なめり」(藤袴)

と嘆かれるように彼女の苦悩を引き起こすものであったのである。日向一雅氏は玉鬘物語における継子譚の話を論じるの上で「玉鬘にとってそのように栄華に奉仕することが彼女の内なる流離を解消するものではないことを精妙に語ったのである。」(8)とされ、話を越えた物語のパロディーの意味を深められている。

その玉鬘も一旦は裳着を経て実父にも会い、(不本意ながらも)太政大臣の妻となって子を成し、その流離は終息したかに見えた。長谷川政春氏は髭黒大將の元の北の方が、その離縁に際し、「ともかくもさすらへなん」という台詞を口にするのに対して「へさすらひ」の主題を背負った玉鬘が、さすらいの生活を完全に脱して定着し、いわゆる玉鬘十帖の最後の巻の真木柱で「さすらひ」の担い手が髭黒の北の方になったことは、追い出された前妻の北の方が玉鬘のへさすらひを代わって背負ったことにならないか」(6)と

にもなり得ない奇妙な立場、それこそ過去に多くあったように、大臣室とか親王妃とか果ては東宮妃とかの生を生きってしまったものが、残った孤独を花やかに彩るために与えられた女性最高の地位、あるいは、低い家柄や斜陽王統から出た女たちが宮仕えの臍を積んだ果てに年老いて辿り着く最高の地位、そんな位置に、将来ある処女を送り込「んだのである」と指摘しておられる。そして「源氏の意識にしろ内大臣の意識にしろ、ここには、尚侍から皇妃(女御)へとこの道は全く予定されていないと考えてよい」されている。その上で、「ここに当然、当の玉鬘をうけとることになる冷泉帝の意向が考えられてよいのかもしれない。しかし尚侍就任への前例はともかくとして(薬子・登子)、女御昇進例は帝の寵をもってして作り得なかった。冷泉帝はこれを破り得る人間として造型されてはいない。」(11)と注を設けておられる。ここでもまた玉鬘の「尚侍」という立場は流動的、不安定なものなのである。

次世代の男たちを引き寄せておく「装飾品」であり、交換される持ち札「カード」である玉鬘には、つまり六条院の栄華を支えるために「すき者どもの心尽くさす」資質が求められており、それ故に源氏はまず、「世づかぬ」末摘花のようであつたら、と心配し、男性達をあしらう「文のけしきゆかしく思さるる」のであり、まずまずの出来に安堵するのではないだろうか。その「価値」を様々な「値踏み」され、「交換」される「カード」にも例えられるような玉鬘の「くさはひ」としての身はその始発から男性達の欲望に対して開かれた存在、「商品」としての「女」であり、髭黒、柏木、冷泉帝、そして源氏、或いは内大臣という男達の様々な形の欲望の媒体に等しい。そうしてみると椿市での右近との邂逅は単なる靈験譚の「救済」の場面ではなく、「流離」の宿命の胎動の場面と読むこ

しておられる。この離婚騒動において元の北の方の父式部卿宮、或いは北の方自身によって

「いと面なう人笑へなることなり」

「人の絶えはてんさまを見はてて思ひとぢめむも、いますこし人笑へにこそあらめ」(共に真木柱)

と「人笑へ」という語を用いて自家の面目について述べられていることに一度注目しておきたい。

さてその髭黒太政大臣家の刀自玉鬘の後日譚竹河巻の冒頭では森一郎氏によって指摘されるように(13)髭黒家の孤立という状況が語られてくる。つまり

「御処分の文どもにも、中宮の御次にくわえたてまつりたまへれば、右の大殿などは、なかなかその心ありて、さるべきをりをり訪れきこえたまふ」(竹河)

という不自然なまでの源氏の遺言を通してのみの、「なかなか」という但し付きでの夕霧家との親交が述べられ、さらには

「尚侍の君の御近きゆかり、そこそこそ世にひろがりたまへど、なかなかやむことなき御仲らひのもとよりも親しからざりしに、……誰にもえなつかしく聞こえ通ひたまはず。」(竹河)

と彼女が実家内大臣家からも疎遠であり、権門の双璧から孤立させられているという。そのことは前段で述べてきたような「父の不在」に根ざすのであって、逆上れば、日向一雅氏に指摘される「一家一族の墓に葬る——祀られるということもなかった」(8)夕顔の「さすらへ」の前史を未だ引きずるものであると考えられる。そのような状況下、髭黒の死後、玉鬘の子供たちの栄達急速に

危ういものとなる。

「男君たちは御元服などして、おのおの大人びたまひにしかば、殿おはせで後、心もとなくあはれなることもあれど、おのづからなり出でたまひぬべかめり。姫君たちをいかにもてなしたてまつらむと思し乱る。」（竹河）

この語り手の口ぶりは八の宮の

「子の道の闇を思ひやるにも、男はいとしも親の心を乱さずやあらむ。女は限りありて、言ふかひなき方に思ひ棄つべきにも、なほいと心苦しかるべき」（椎本）

という台詞に通うものがある。竹河巻はこの玉鬘の娘たちの結婚相手探しが主な筋立てとなっている。

そもそも、勾宮三帖全体が源氏亡き後の三権門各々の婿選びの物語なのである。勾宮巻では夕霧家のかしづき娘六の君に対して

「六の君なん、そのころの、すこし我なと思ひのぼりたまへる親王たち上達部の御心尽くすきはひにものしたまひける」

（勾宮）

と、玉鬘十帖での用例にも似た形で「くさはひ」の語が使われてくる。巻名となっている催馬楽「竹河」では

「花園に 我をば放てや 我をば放てや 少女たぐへて」（14）

とその「家」を寿ぐ「この殿は」と共に歌われ、それと共に「家の繁栄を握る娘を得たいものだ、と祝言を述べる意味で歌われたのであろう。この催馬楽は他に初音・真木柱巻と玉鬘関係巻に集中し、玉鬘が「家」の繁栄を司る「くさはひ」娘であったこと、そしてここではその娘大君が同じ立場におかれているということなのであろう。三田村雅子氏は「この三帖が親の立場からの婿選びの物語で

え」とされ、玉鬘の息子左近中将は帝の不興を被り、玉鬘を非難する。「父」の縁だけではなく、先に指摘した「三従」において、父、夫の死後頼るべき「子」にまで背かれるという事態がおきてくるのである。そして最終的には大君の男子出産によって、かつて内大臣家の命運を担って入内した異母姉弘徽殿の女御との間柄も「おのづから御仲も隔たる」という事態にいたるのである。

一方中の君は、帝の不興への配慮から、玉鬘からその官を譲られるという形で尚侍として出仕する。前段で後藤様子氏の研究を引用したように、その地位は「入内後は皇妃に準ずる不自由さに縛られ、正妃として待遇さればまだしも、遂に尚侍以上の何者にもなりえない奇妙な立場」に過ぎないという位相にある。この巻を通して玉鬘が、実際の出仕から遠ざかり、むしろ鬘黒家の北の方としての立場にありながら、「尚侍の君」と呼称されていることは、彼女が過去に置かれた状況が、その娘中の君に同じようにふりかかっていることを表しているのではないだろうか。

また、大君入内に関して

「なかなかにてまじらはむは、胸いたく人笑はれなる事もやらむと慎ましければ。殿おはせまししかば、行く末の御宿世宿世は知らず、ただ今はかひあるさまにもてなしたまひてましを」

「人わらへに、はしたなうもやもてなされむ」（共に竹河）

と、鬘黒の元の北の方に関して注目した「人笑へ」という語が使われてくる。この言葉は、後の宇治十帖で大君が

「昔の御おもむけも、世の中をかく心細くて過ぐしはつとも、なかなか人わらへに、軽々しき心つかふななど、のたまひおきしを」

「人わらへなる事をそふるありさまにて、亡き御影をさへ悩ま

あるということ、正編で言えば朱雀院の女三宮婿選びの系列に連なるものであることを意味している。そして橋姫物語もまた、八宮による婿選びを裏返しにした物語として始発する。」（15）と位置づけておられる。朱雀院の若菜冒頭における女三宮の降嫁先選びは、先に引用した

「女は心より外に、あはあはしく……うち棄てて後の世に漂ひさすらへむこと、いとうしろめたく悲しくはべる」（若菜上）

菜上）

という女の宿世論に基づく、女三宮の「さすらへ」の心配から出発し、そして続く宇治十帖では八の宮によって

「行く末遠き人は、落ちぶれてさすらへんこと、これのみこそ、げに世を離れん際の 絆なりけれ」（橋姫）

と娘たちの後見を薫に頼む際に同じく「さすらへ」の語が用いられることも見通したい。

そして玉鬘の大君の結婚は玉鬘の更なる孤立を描き出す。夕霧家の秘蔵っ子蔵人少将の求婚を退けることで「父」源氏の遺志を継ぐ「さるべきをりをり訪れ」るはずの夕霧も大君参院に際して現れず、元より疎遠であったらしい内大臣家の娘雲居雁からは放心状態の蔵人少将の世話で忙しい、とあてこすりの文が届く。或いは、

「大納言殿よりも、人々の御事奉れたまふ。北の方は故大臣の御むすめ、真木柱の姫君なれば、いづ方につけても睦ましう聞こえ通ひたまふべけれど、さしもあらず。藤中納言はしもみづからおはして」（竹河）

（竹河）

と異母兄弟大納言や継娘真木柱との縁遠さが語られ、同じく継子の藤中納言の参来に「しも」という係助詞が付される。しかも、この院への入内は鬘黒の生前の帝妃への志を「かくひき違へたる御宮仕

したてまつらむがいみじさ」（共に総角）

等々、執拗なまでに繰返し父の遺戒、面目と連動し自分達姉妹の結婚に関して使用している語である。池田和臣氏はこの語の共通性を通して「竹河巻は後見脆弱な女君の行く末の不安という、宇治の女君達に通う因子を持っている」（16）としておられる。これら注目した「人笑へ」の用例は、日向一雅氏が紫の上が若菜巻で思う「人わらへ」に關しても

「人わらへ」という恥の契機は、光源氏の第一夫人として自負してきたものの、実はみづからの依拠する現実の上に成立しているはずである。「家」を根拠として、あるいは「家」に包まれて個人は存在したのであるゆえに、恥の契機は個人に属するだけでなく、「家」に属するという事であった」（17）

としておられるように、全て個人が「笑われる」のではなく、家の恥に繋がるものとして使われている。

以上のように、夕顔の「さすらへ」は玉鬘に引き継がれ、玉鬘の存在が原因で鬘黒の元の北の方に転移し、また玉鬘の「さすらへ」の根本である「父の不在」家の所屬が不明という状況に、夫の死が加わることによって、その娘達の苦境が始まる。その状況には源氏物語の発端における桐壺更衣の状況「後宮における嫉視」が繰返され、「さすらへ」という父の憂慮を通して女三宮の人生と、「人笑へ」というキーワードを通して紫の上の苦悩とも響き合い、宇治十帖の大君へと受け継がれていく。

明石の君と源氏が結ばれ、その姫君が今上帝に入内し中宮となる、そのことで明石の入道、そして桐壺更衣の父大納言の遺志、一門の繁栄は成就する。その成就が勾宮三帖、そして宇治十帖にも描か

れてくる。娘を媒体として他家の男の、究極的には天皇の欲望と結びつき、家の繁栄は成り立つ。そんな中流貴族の夢物語の傍らで「家」を代表する存在である「父」によって心配される、「家」の「くさはひ」である娘の「さすらへ」、それによってまねかれる「人笑へ」が「家」を大きく傷つけるものであり、そのことが娘自身の苦悩としてはね返り、その生き方をも規定してゆくというモチーフが繰り返される。そのように物語全体を貫く、この時代の女性の生の系譜を、竹河巻における玉鬘とその娘達の物語は繋いでいるのではないだろうか。

(注)

- (1) 『新講源氏物語・下』97. 5 池田亀鑑 クレス出版
『源氏物語』成立前後―『紫式部日記』との関連から― 野口元大 『源氏物語の探究16』 風間書房
(2) 『源氏物語第三部―「道心」と「恋」と―』『源氏物語の主題と方法』79. 5 森一郎 桜楓社
(3) 『源氏物語の正編と続編』 藤村潔 『藤女子大学国文学雑誌』73. 3
(4) 『勾宮三帖論』『源氏物語続編の研究』91. 10 大朝雄二
(5) 『浮舟物語についての一考察―玉鬘物語との関連性を中心として―』白崎ちか子『語文』88. 3 日本大学国文学会
(6) 『源氏物語のへさすらいの系譜』『物語史の風景』97. 7 長谷川政春 若草書房
(7) (6)、『物語の方法』89 三谷邦明 有精堂、『源氏物語序説』78. 5 小林茂美 桜楓社 など

題を考える上で興味深い。ここでは男と対等に向き合う「女」ではなく「商われる女」という観点で「市」という場に玉鬘をおいてみたい。氏は玉鬘と右近が椿市で再開を果たすことについても「市が別れ別れになっていたものたちの出会う場であったことを示している」と注目しておられる。

- (13) 『源氏物語の構想の方法』『源氏物語の方法』69. 5 森一郎 桜楓社

- (14) 日本古典文学全集25 小学館 藤村氏は(3)でこの催馬楽に橋が歌われることも橋姫巻への伏線として位置づけておられる

- (15) 『第三部発端の構造』『源氏物語 感覚の論理』95. 三田村雅子 有精堂

- (16) 『竹河巻と橋姫物語試論』 池田和臣 『源氏物語及び以後の物語 研究と資料』79. 12 武蔵野書院

- (17) 『第一部についての断章』『源氏物語の主題―「家」の遺志と宿世の物語の構造』83. 5 日向一雅 桜楓社

◆引用本文は小学館日本古典文学全集によった

- (8) 『玉鬘物語の流離の構造』『源氏物語の王権と流離』89. 10 日向一雅 新典社

- (9) 『聖なるものの末裔―孤児・継子・申し子』 広田収 『神話・禁忌・漂泊―物語と説話の世界―』76. 広川勝美編 桜楓社

- (10) 『玉鬘十帖の方法』『物語の方法Ⅱ』89. 三谷邦明 姥澤隆司氏が「玉鬘登場の様相―玉鬘造型と光源氏の意図」(『源氏物語の探究13』88. 風間書房)で指摘しておられるように、内大臣家の后がねとして雲居雁と「交換」される存在として玉鬘を登場させるには、あまりに冷泉後宮は政治勢力が拮抗・安定しており東宮妃としても年齢的に相応しくないが、源氏は近江の君の噂を聞いて陰口を叩き「かく聞きまいて中将をいたくはしたなめて、わびさせたまふつらさを思しあまりて、なまねたしも漏り聞きたまへかしと、思すなりけり。かく聞きたまふにつけても「対の姫君を見せたらむ時、また侮らはしからぬ方にもてなされなむはや……いかにものしと思ふらむ」云々と夕霧・雲居雁の結婚問題と「くさはひ」を求める内大臣に玉鬘の存在を知らせてやったら、という思いが連続して語られている。岷江入楚は「王(マ)ヲ内ニ見セ奉ラハ一かとアルヤウニもてなしてカク養育アリシハ随分ノ高恩ソト思ハセ奉ラシノ心也云々」(源氏物語古注集成)という説を紹介している。

- (11) 『尚侍上攷』『源氏物語の史的空間』86. 2 後藤祥子 東京大学出版会

- (12) 西郷信綱氏は「市と歌垣」(『文学』80. 4 岩波書店)で「市においてセリを通して成立したであろうこうした交易関係は、記号論的にはばそのまま、歌垣における男女の関係に移して考えることができる。敵意と友情、対立と協同、警戒と歓待、競争と補完といった関係を市と歌垣は共有する。」とされ、今後ジェンダーの問